

文学研究における引用行動

—シェークスピア研究を題材とした引用カテゴリー調査—

Citation Behavior in Literary Research

—Citation Context Analysis in Shakespeare Studies—

真弓育子

Ikuko Mayumi

Résumé

This article describes a study to investigate citation behavior in literary research and to clarify the characteristics of methodologies of the literary research by examining the citation behavior in detail.

1,946 references cited by 68 papers of Shakespeare study were randomly sampled, and examined in terms of following three items. These are, (1) indication of bibliographic description of cited works and papers, (2) proportion of citations to "works of Shakespeare" for all citations, (3) citation functions which are examined by classifying them into 6 categories (basic, subsidiary, additional information, perfunctory, partial negation, and total negation).

Main results of three items above are ;

- (1) Bibliographic descriptions of most citations are clearly indicated but as to citations to "works of Shakespeare", their bibliographic descriptions are sometimes omitted.
- (2) Citations to "works of Shakespeare" account for about 30 per cent of all citations, and remaining 70 per cent are citations to "papers by Shakespearian scholars".
- (3) Of all citations to "papers by Shakespearian scholars", about 45 per cent are "subsidiary citations which are used to support ideas of citing paper authors, and "basic citations" to previous papers which are essential for the study in the citing papers are about 6 per cent.

I. はじめに

II. 引用カテゴリー調査の先行例

III. シェークスピア研究を題材とした調査

A. 調査目的

B. 調査方法

真弓育子, 慶應義塾大学文学研究科図書館・情報学専攻博士課程, 東京都港区三田 2-15-45
Ikuko Mayumi, Graduate School of Library and Information Science, Keio University, 2-15-45, Mita,
Minato-ku, Tokyo.

C. 調査結果

IV. 考察

V. おわりに

I. はじめに

引用は、研究成果という風景の中の凍りついた足跡である¹⁾と言われている。その足跡が、研究者の思考の道程を示すものとするならば、この言葉は、引用を詳細に調査することによって研究過程の一端を明らかにできることを意味していると考えられよう。

本論は、図書館・情報学分野において研究が不足している人文科学分野に焦点を当て、その代表例である文学研究を題材として選んだ。そして、その引用行動を調査することから、文学研究における研究方法の特徴の一面を明らかにしようとするものである。

ここで予め、引用行動の調査のもつ意味について、説明しておく。従来の引用文献分析では、引用をすべて同質のものとして見なしてきた。しかし、引用が行なわれる理由は、“先駆者に敬意を表するため”や“研究の出発点となった文献を示す”といったように、多様である。それら多様な理由を持つ引用を、同質のものとして見なしているのは、引用行動を詳細に分析することはできない。そこで、ここでは、引用すべてが同じ意味を持つわけではないという考えに立ち²⁾、引用が行なわれる理由を分析することで引用行動を調査する。さらに、引用行動がその対象である分野の研究の特徴を反映していると仮定した上で文学研究における引用行動を実際に見ることによって文学研究の研究の特徴を明確にすることもできよう。

ところで、文学研究においてその引用行動を明らかにするためには、前もって次の二点について検討しておく必要がある。

第一に、論文中で引用が明示されているか確認する。これを行なうに当たっては、次のような背景がある。研究者は、研究を行なったり、調査結果を考察したりする際に、何らかの目的でいくつかの文献を利用し、その引用した文献を論文中で引用する。しかし、その引用文献の書誌事項は完全に表示されるとは限らない。また、それ以前に、他の研究者による著作を無断で論文に使用するという、言わば“剽窃”という問題も存在する。しかし、ここではこの問題にまで深く立ち入らない。ここで

は、研究を行なう上で利用された文献のほとんどは、その研究が発表された論文中で引用されると仮定して、その引用された文献の典拠（つまり書誌事項）がどの程度明示されているかを確認するところまでを範囲とする。

第二に、文学作品の引用についてであるが、文学作品の特徴として、まず文学作品そのものの利用が当然考えられる。つまり、文学作品は、研究の対象として利用されたり、論文を書く場合にその内容を理解し易くするために引用されたりすると考えられる。従って、論文中で文学作品が頻繁に引用されることも当然考えられる。しかし、引用される文献が文学作品ばかりとも考えられない。そこで、文学作品以外の文献が何の目的で引用されているかを詳細に調査するためにも、まず文学作品の引用について調査しておく必要がある。

以上の二点について検討した後、“なぜ著者が、その文脈で、他の研究者による文献を引用する必要があったのか”という点にまで立ち入って、引用行動を詳細に分析、検討する。その結果から、文学研究における方法論的な特徴を考察することが本論の主要な目的である。

この主要な目的のために、引用行動を分析する手段として、“引用カテゴリ調査”という手法を使用する。

II. 引用カテゴリ調査の先行例

ここでは、今までに行なわれた引用カテゴリ調査を概観することから、本論の目的に適した手法としての応用を考えてゆく。

引用カテゴリ調査とは、論文中で引用が行なわれている文脈を探し、その前後の文脈から引用の意味（著者から引用を行なった理由）を判読し、いくつかのカテゴリに分類した上で、各カテゴリの割合を調査するものである。

このような引用カテゴリ調査が行なわれ始める以前に、すでに Garfield によって、引用の意味についての検討が行なわれていた³⁾。彼が検討した15種類の引用カテゴリの中には、“先駆者に敬意を表するための引用”や“関連文献を称えるための引用”といったものがあり、引用を行なっている論文にとって必ずしも関係のある文献だけがその論文中で引用されているとは限らない

ということを示した。Lipetz も、引用を行なっている論文と引用されている論文との双方の観点から引用を捉え、29種類にも及ぶ包括的な引用カテゴリーを設定した⁴⁾。しかし、両者とも本論で扱おうとするような実際の調査は行なっていない。

実際に引用カテゴリー調査が行なわれたのは、Garfield の検討から10年以上のちのことである。最初のそして代表的なものとしてされている調査は、Moravcsik と Murugesan による、物理学を対象としたものである⁵⁾。彼らを使用したカテゴリーは4項目あり、各項目は2種類に分けられている。従って、各引用は、1項目ごとにいずれかの種類に分類され、全体で4回分類されることになる(第1表参照)。

カテゴリー 1a, 1b, 2a, 2b は、研究者による文献を引用した場合のものである。この種の引用は、研究者の行動を規定し方向づけるノルム(科学の制度)によって、研究者が自らの研究を行なう上で有効であった他の研究者の文献を引用するように求められることから行なわれていると考えられる⁶⁾。カテゴリーは、研究を行なう上では実際に使用されていないものであるが、他の研究者による文献を論文中に取り上げ、それと研究者自身の研究とを比較して研究者自らの意見を明解にしようとするために利用された文献である。しかし、カテゴリー 2a のように、研究においても使用されず、論文中の議論にも利用されず、単に挙げられているだけの文献の場合には、研究分野の“友人、同僚あるいは高名な人

々に対して儀礼的に”⁷⁾ 引用が行なわれているとも考えられる。さらには、“論文の評価を高めた意図のもとにあとからいくつかの引用文献を使って体裁をつくり、あるいは不必要な文献を追加したり、論文中に適当に配置したりするような不正行為”⁸⁾を行なっているとも考えねばならないであろう。

Moravcsik と Murugesan の調査の他にも、引用の均一性(引用がすべて同質だとすること)に対する疑義を質そうとする目的で、Chubin と Moitra⁹⁾、Spigel-Rösing¹⁰⁾、Oppenheim と Renn¹¹⁾らが調査を行ない、また、著名な学者の影響を検討するために、Cole¹²⁾ や Ruff¹³⁾らが調査を行なっている。

これらの調査の多くは、自然科学分野において行なわれたものであるが、人文科学分野においても、Frost がドイツ文学を対象として文学研究の引用カテゴリーを設定することを目的とした調査を行なっている¹⁴⁾。Frost の設定した引用カテゴリーは、まず引用文献の種類(文学作品や作家の書簡に対する引用と、他の研究者による文献に対する引用)に分類され、次に15種類のカテゴリーに細区分されたものである。

Frost の引用カテゴリーには、“作家や文学作品に対する著者自身の意見に信憑性を与える”とか、“特定の版や翻訳されたタイトルについて紹介する”といった文学研究特有のカテゴリーが含まれており、文学研究の引用カテゴリー設定という目的に適った詳細なものであった。

以上、今までに行なわれた引用カテゴリー調査を概観してきた。それらは、研究方法の特徴を明確にすることを目的とした調査ではなかったにもかかわらず、観点を換えて見れば、本調査の目的に有用な引用カテゴリーを設定しているとも考えられる。これらを参考にすることから、引用行動の分析を道じて研究方法の特徴を考察する際に必要とされるいくつかの引用カテゴリーを設定することができるのである。

従って、本論では、それら既存の調査で使用された引用カテゴリーの中から主要なものを選び出し、それらを使用することにした。さらに、それぞれ意味の異なる引用カテゴリーを数少なく選り出すことから、どのような意味を持つ引用カテゴリーが特に多いかという点についての分析が可能になるようにする。これは、調査の対象分野の特性によってどのような意味を持つ引用が多いかといったパターンの検出を可能にするのである。そしてそのパターンの相違から対象分野における研究方法の特

第1表 Moravcsik と Murugesan の引用カテゴリー

1	a	概念や理論のもとになった文献
	b	ツールや技術を採用した文献
2	a	著作を完成させるために必要であった文献
	b	実際に使用されず、単に言及されただけの文献
3	a	著者の議論の展開に必要であった文献
	b	比較するためや、考えを明らかにするための文献
4	a	肯定的に扱われている文献
	b	否定的に扱われている文献

出典: Moravcsik, M. J.; Murugesan, P. “Some results on the function and quality of citations”. *Social Studies of Science*. Vol. 5, p. 86-92 (1975).

文学研究における引用行動

徴を明確化することができるかと考える。

本論では、以上のような引用カテゴリー設定における条件を満足するような引用カテゴリー群を独自に設定し調査する。

III. シェークスピア研究を題材とした調査

A. 調査目的

本調査は、文学研究の研究方法を明確にするため、その引用行動を段階を追って詳細に分析するものである。

まず、研究者は論文中である文献を引用していることを明瞭に示しているか、あるいは引用した文献の書誌事項を明確に記述しているかといった引用の表示の仕方について調査する。仮に研究者が引用した文献の書誌事項を論文中に明示しないとすれば、引用行動を分析する以前に、引用の表示についての規準が存在せず無秩序な状態で引用が行なわれていることになり、その原因を調査する必要が起る。しかし、文学研究においては、例えば Modern Language Association of America の *MLA Style sheet* の如く、引用の表示の仕方を定めたものも存在し、引用の表示が無秩序な状態で行なわれているとは考えにくい。従って、どの程度詳細な引用の表示が行なわれているかについてまず調査することにする。

引用の表示がある程度詳細に行なわれていることが確かめられた上で、文学研究ではどのような種類の文献が頻繁に引用されているかについて調査する。文学研究においては文学作品が不可欠な資料であることを考慮すれば、文学作品の引用が多いという予測も可能であろう。しかし、研究文献の引用はどの程度行なわれているのだろうか。文学作品の引用が圧倒的な割合を占めることで、他の研究者による文献の引用は僅かなのだろうか。この点について明確にしておく必要があると考える。それは、この調査の後、他の研究者による文献の引用について詳細に分析する際にも影響を及ぼすと考えられるからである。

引用の表示の仕方について調査し、文学作品と他の研究者による文献との各々の引用の比率も調査した上で、最後に主要な調査を行なう。つまり、他の研究者による文献がなぜ引用されたのか、その理由を分析することである。この分析のためには、前節で概説した引用カテゴリー調査の手法が使用される。

以上の調査目的を段階的に要約すると、下記の通りである。

- (1) 引用の表示がどの程度詳細に行なわれているかを確認する。
- (2) 文学作品と他の研究者による文献との各々の引用の比率を検討する。
- (3) 他の研究者による文献が引用された理由を分析する。

B. 調査方法

1. 対象

ここでは、文学研究においてその研究の歴史も長く、内容も豊富であるシェークスピア研究を題材とする。その代表的な雑誌である *Shakespeare Quarterly* に毎年掲載される年間書誌 “Annual Shakespeare Bibliography” に、1978年から1982年までの5年間に収録された英文による雑誌論文7,028件から100件を系統的に無作為抽出し、その引用文献について調査する。対象論文は69誌に掲載されており、出版年は1974年から1981年目までにわたっている。

2. 項目

a) 引用の表示

引用の表示が詳細に行なわれているかについて、下記の3点を調査する。

1) 引用の有無

引用が全く行なわれていない論文があるかを調査する。

2) 引用文献の書誌事項の表示位置

引用された文献の書誌事項が、論文の中のどの箇所（引用が行なわれている文脈中とか、論文の最後、脚注など）に記載されているかを調査する。

3) 引用文献の書誌事項の省略

引用された文献の書誌事項を全く記載していない場合や出版事項などを部分的に省略している場合があるかどうかについて調査する。

b) 文学作品に対する引用

文学作品を引用している件数を調査する。但し、独立したパラグラフとして、文学作品の本文が原文通りに引用されている場合のみを数え、論文の題材となっている文学作品の書名やその一節が同一論文中に何度出現しても、それらは数えないことにする。

c) 引用カテゴリー調査

第V章で検討された引用カテゴリー群の設定条件を考慮し、既存の調査で使用されていた主要なカテゴリーを組み合わせて使用する。

1) 基礎的引用

論文作成に直接使用され、論文の基礎となった文献に対する引用。

論文作成にあたって基礎となった文献に対して、著者が知的恩恵を受けたことを述べるための引用である。Crane の言葉を借りれば、“執筆者のアイデアの発展に決定的な役割を演じた論文”¹⁵⁾に対する引用である。

2) 補助的引用

論文の著者の意見を補い、信憑性を与えるための文献の引用。

著者が自らの意見や考えを補うために、他の研究者の意見を利用したり、他の研究者による文献と比較することで自らの意見をより明確にするための引用である。基礎的引用ほど引用している論文に大きな影響を与えた文献ではないが、論旨の展開に必要であった文献の引用である。

3) 付加的引用

引用している論文の内容に関連している文献の引用。

研究の題材、対象、手法などのいずれかが同一であったり、類似している研究を紹介する目的で行なう引用である。

4) 儀礼的引用

先駆者への敬意を述べるためや過去の研究の流れを紹介するためにだけ取り上げられた文献の引用。

論文作成に全く影響を与えなかったにもかかわらず、儀礼的な意味で引用される。

5) 全面的否定的引用

引用された文献を著者が全面的に否定している場合の引用。

他の研究者による文献を否定することを目的として論文を作成する場合や、否定することから研究を始めるといった場合などに行なわれる引用である。

6) 部分否定的引用

引用されている文献の一部分(手法、用いたデータ、結果など)について否定している場合の引用。

上記の6カテゴリーのうち、引用文献が肯定的に扱われている場合には、カテゴリー1)から4)までのいずれかに分類される。否定的に扱われている場合には、5)か6)に分類される。カテゴリー1)から4)は、引用を行なっている論文の作成に対して関係が深いものの順に並べ

られているとも考えられる。

まず、引用文献を6カテゴリーに分類し、全引用に対する各カテゴリーの割合を調査する。次に、論文の構成部分(序論、本論、結論)ごとに各カテゴリーの割合を調査する。また、調査対象論文をその研究内容ごとにグループ化し、グループごとに各カテゴリーの割合を調査する。この場合、研究内容は作品研究(文学作品を研究の題材とする研究)、作家研究、文学史研究、テキスト研究(異版の校訂などを含めた原典に関する研究)、劇研究、以上の5種類に分類する。

C. 調査結果

シェークスピア研究を題材としてその引用行動を調査した結果を、調査手順に従って以下に示す。

1. 引用の表示

a) 引用の有無

調査対象とした100論文のうち23論文は全く引用が行なわれていない。

b) 引用文献の書誌事項の表示位置

引用文献の書誌事項が各ページの脚注に記載されているものが33論文、論文の最後に“Note”、“Reference”、“Bibliographie”、“Documentation”などの名称が付与されてまとめられて記載されているものが論文である。書誌事項がすべて、引用が行なわれている文脈に記載されているものは13論文である。

1論文中で大半の書誌事項が脚注や“Note”などのものとまとめられて記載され、一部の書誌事項が文脈に記載されているものが40論文ある。

c) 引用文献の書誌事項の省略

文中で引用が行なわれているにもかかわらず、引用されている文献の書誌事項が記載されていないものが9論文、一部省略(例えば、出版事項やページ数などの省略)されているものが68論文である。但し、書誌事項が全く記載されていない文献は、いずれも文学作品である。

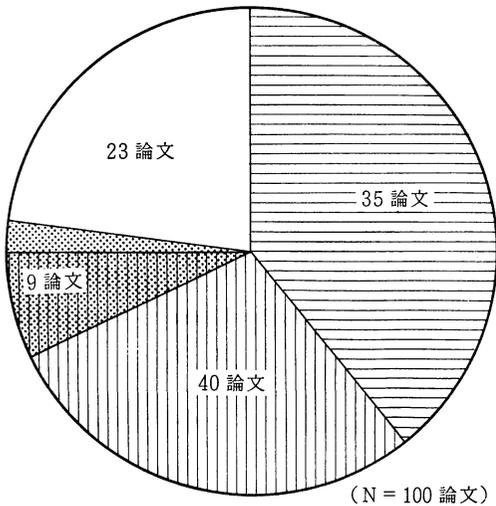
以上の点を図で示したものが第1図である。全体的に見て7割近くの論文が、引用文献の書誌事項を一部省略してはいるものの、ある程度明瞭に記載していることがわかる。

2. 文学作品に対する引用

a) 全引用文献数に占める割合

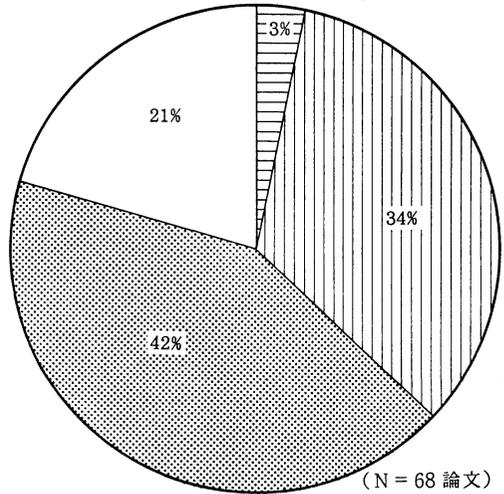
引用が行なわれていた77論文のうち、絵画、批評、劇評、映画評などが中心である論文とレビュー論が合計9論文含まれている。これら9論文は文学研究を対象とし

文学研究における引用行動



-  すべての引用が明確な論文。
-  一部あるいはすべての引用が文中で行なわれている論文。
-  文学作品の引用に典拠が記載されていない論文。
-  まったく引用が行なわれていない論文。

第1図 引用の表示



-  100%
-  100%未満 50%以上
-  50%未満 1%以上
-  0%

第2図 1論文あたりの「文学作品に対する引用」の占める割合

てより詳細に分析してゆくこの段階では、厳密な文学研究の論文と同様に扱うことはできないため、調査結果からは除外する¹⁶⁾。特にレビュー論文は、その引用が原著論文での引用とは性格を異にするといった点から除くことにする。従って、この後は68論文に関する調査結果を示す。

68論文の全引用文献数は、1,946件である。このうち文学作品を引用しているものは634件で、全体に占める割合は32.6%に過ぎない。

1論文あたりの文学作品に対する引用の割合を概観したものが第2図である。文学作品に対する引用の割合が100%であった論文(つまり文学作品に対する引用のみが行なわれ、他の研究者による文献に対する引用が行なわれていない論文)は、全体の3%(2論文)に過ぎない。逆に、他の研究者による文献の引用のみを行なっている論文は全体の21%(14論文)もある。

さらに、文学作品と他の研究者による文献の双方を引用している52論文について、それぞれの文学作品に対する引用の割合を算出し、それらを平均しても、1論文あ

たり約44%で半分を占めるに至っていない。

b) 出現位置

文学作品と他の研究者による文献との双方の引用の出現位置を論文の構成に従って論、本論、結論の各部分に分けて見ると(第2表参照)、文学作品の引用は本論において大部分の引用が行なわれており、序論、結論ではほとんど行なわれていない。他の研究者による文献に対する引用では、本論でその大部分が行なわれている点は文学作品に対する引用と同様であるが、序論で行なわれている割合が以上あり、この点が文学作品のそれとはやや異なる点である。

第2表 引用の出現位置(%)

種類	出現位置			
	序論	本論	結論	計
文学作品の引用 (N=634)	3.0	95.0	1.3	100
他の研究者による文献の引用 (N=1,312)	14.0	83.5	2.5	100

3. 引用カテゴリー調査

a) 引用カテゴリー

第3図は、全引用に占める各カテゴリーの割合を示したものである。著者自身の意見を補うために行なわれる補助的引用の割合が最も高く、全体の45%を占めている。次に関連文献を紹介する付加的引用の割合が高く、34%を占めている。しかし、論文作成に最も関係した文献を表わす基礎的引用は、6.9%と非常に低い。さらに、否定的引用では全面否定のものは全く行なわれず、部分否定的引用が僅かに行なわれているだけである。

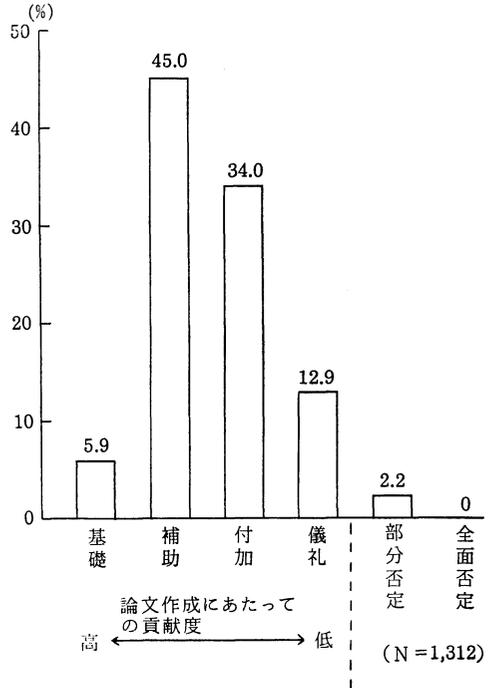
b) 引用カテゴリーと出現位置

各カテゴリーの出現位置を見ると(第4図参照)、各カテゴリーとも本論での出現が多く、序論と結論ではあまり出現せず、それらには大きな差がある。しかし、儀礼的引用はその3割以上が序論で行なわれており、僅かではあるが他のカテゴリーと異なっている。

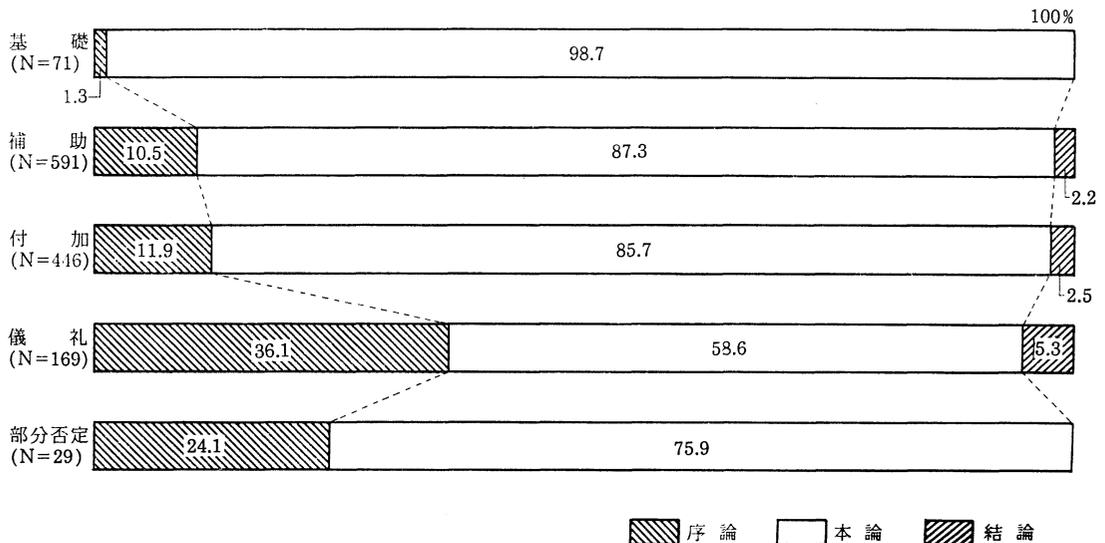
観点を換えて、出現位置の方から見ると(第5図参照)、各部分ともに補助的引用の割合が高く、付加的引用が次に高い。他の部分と比較して本論においては、基礎的引用の割合が高く、その代りに儀礼的引用が低くなっている。結論では、基礎的引用も否定的引用も行なわれていない。しかし、補助的引用と付加的引用の割合が高く、基礎的引用が低いといった全体でのパターンは、出現位置ごとに見ても変わらない。

c) 引用カテゴリーと研究内容

68論文をさらにその研究内容ごとに細区分し、まず文学作品に対する引用の割合を見たものが第3表である。文学作品を研究の題材とする作品研究においては、文学作品に対する引用が最も高い割合(42.4%)を占めてい

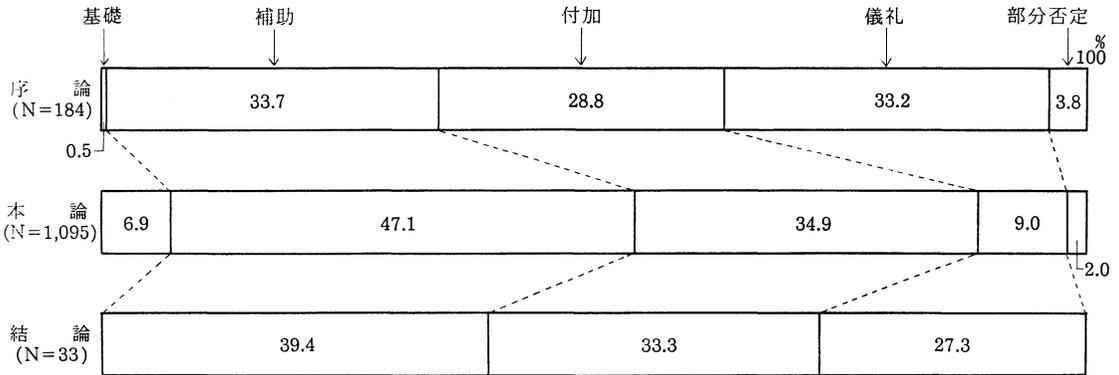


第3図 全引用に占める各引用カテゴリーの割合



第4図 各引用カテゴリーの出現位置

文学研究における引用行動



第5図 論文の構成部分から見る引用カテゴリーの分布

第3表 研究内容から見る「文学作品に対する引用」の割合 (%)

研究内容	種類	文学作品の引用	他者による文献の引用	計
作品研究 (N=1,308)		42.4	57.6	100
作家研究 (N=178)		14.0	86.0	100
テキスト研究 (N=163)		11.0	89.0	100
劇研究 (N=143)		25.2	74.8	100
文学史研究 (N=154)		00.0	100.0	100

第4表 研究内容から見る引用カテゴリーの分布 (%)

研究内容	引用カテゴリー	基礎	補助	付加	儀礼	部分否定	計
作品研究 (N=753)		2.7	43.7	37.3	13.3	3.1	100
作家研究 (N=153)		21.6	51.6	16.3	9.2	1.3	100
テキスト研究 (N=145)		0.0	54.5	29.0	15.9	0.7	100
劇研究 (N=107)		0.9	36.4	50.5	11.2	0.9	100
文学史研究 (N=154)		15.0	42.2	28.6	13.0	1.3	100

る。しかし、作家研究やテキスト研究では文学作品に対する引用の割合は 10% 台を示し、文学史研究では 0% である。ここで注意すべき点は、文学作品を最も頻繁に利用する作品研究でさえも全引用に占める文学作品の引用の割合は、半分にも及ばないことである。

次に、研究内容ごとに各カテゴリーの割合を見ると(第4表参照)、作品研究の場合、基礎的引用は全体平均の 6.9% (第3図参照) よりもさらに低い 2.7% である。これは非常に低い割合である。作家研究や文学史研究では、全体平均の 2 倍以上の割合を示し、儀礼的引用よりも高くなっている。しかし、研究内容ごとに見たこの場合においても、全体的に見たパターンは大きく変わらない。さらに、代表的な研究内容である作品研究に限って見れば、補助的引用の割合が高く、基礎的引用が低いといったパターンが顕著になっている。

II. 考 察

まず、調査結果から明らかになった主な点を要約すると以下の 3 点となる。

(1) 引用文献の書誌事項は、文学作品の場合においてのみ、全面的に省略される傾向が見られる。しかし、他の研究者による文献に対する引用の場合には、その書誌事項の一部が省略される点を除けば、比較的明瞭に記載されている。

(2) 文学作品に対する引用は全引用の約 3 割を占め、その大半が本論中に出現することが明らかになった。しかし、作品研究に限って検討した場合でも、文学作品に対する引用の割合は 4 割しか占めず、大半を占めるまでには至らなかった。

(3) 他の研究者による文献の引用が、全引用の 7 割を占めた。これらを独自の引用カテゴリー群を使用して分

類を行なった結果、研究や論文作成の際に基礎的な役割を果たした文献の引用は少なく、著者自らの意見を補うための文献の引用が最も多く、全体の半分近くを占めていることが明らかになった。

第一点でまとめたように、文学作品での引用の表示が比較的明確であることが確認された。この結果から、引用行動の詳細な分析が可能となった。そこでまず論文中における文学作品に対する引用について調査を行なった結果、文学作品に対する引用が全引用に占める割合は意外に低く、半分を占めるまでにも至らなかった。このことは、文学研究が文学作品のみを利用することによって行なわれてはいないことを示している。さらに、他の研究者による文献が何らかの理由で大いに利用されていることも判明した。従って、この理由を分析することなしに文学研究の引用行動を明確にすることは不可能であると考えられる。

以上の過程を経て、引用が行なわれた理由について詳しく分析することになったわけである。その結果、補助的引用や付加的引用が全引用に占める割合は高く、基礎的引用は低いといったパターンが、文学研究における引用行動の特徴として明確になった。このパターンは、引用の出現位置から検討しても、また研究内容ごとに検討しても、ほとんど変化しなかった。

これらの結果から、次のことが解釈可能である。すなわち、文学研究者は他の研究者による文献を引用することによって、研究者自らの主張を補ったり、関連文献を紹介したりしながら、自らの研究のオリジナリティを確保しようとしているということである。さらに、文学研究者は自らの研究を他の研究者による文献を基礎として行なう傾向は少なく、むしろ自らの考えを展開しながら研究文献を補助的に利用してゆく傾向があると考えてよいだろう。

従って、文学研究には過去の研究文献を基礎として行なう累積的研究の傾向は少なく、著者自らの考えや研究の独自性に重点を置く傾向があると言えよう。

また、文学研究における累積的研究の傾向について特に考察する場合には、他の分野を対象として行なわれた引用カテゴリー調査での結果も考慮すべきであろう。

Small によれば、自然科学分野での調査結果は、基礎的引用と儀礼的引用が多いことを示している¹⁷⁾。さらに自然科学分野において基礎的引用が多い点、その分野での累積的研究の特徴を反映していると考えられるには、

Price の次言葉が意味を持つてくる。¹⁸⁾(科学論文は)、前の諸論文の基礎の上に築かれ、さらにそれは次の論文への出発点の一つとなる。……この学問上の煉瓦積みのも最も明確なあらわれは、参考文献の引用である¹⁸⁾。

従って、自然科学分野の場合には、研究方法の特徴である累積的性格がその引用行動にも反映し、その結果、基礎的引用が多く行なわれていると言えよう。しかしながら、本論の調査から明らかになったように、文学研究では基礎的引用が少ないといった引用行動が存在し、それは文学研究の研究方法が累積的性格を自然科学ほど強く持たないためであると解釈できよう。

以上のような文学研究における引用行動は、人文科学分野での特徴のひとつとしても考えられよう。しかし、人文科学におけるすべての分野にその特徴が該当するとも考えられない。従って、人文科学における他の分野についてもその引用行動を詳細に調査し、自然科学分野で明らかにされなかった人文科学分野独自の研究方法について考察してゆく必要があるだろう。

V. おわりに

本論で使用した引用カテゴリー調査の手法は、文学研究における引用行動のパターンを検出し、その結果から研究方法の特徴を考察する上で有効なものであった。しかし、この手法から得られた結果については、より詳細な検討が必要であろう。

考察での中心は、基礎的引用の割合が少ない点に置かれ、文学研究における研究方法の特徴の一つとして累積的研究の傾向が少ないことが取り上げられた。しかし、調査の結果、引用カテゴリーの中で最も高い割合を占めたのは、補助的引用であった。また、部分否定的引用の割合も他の分野と比較すれば、一概に少ないと判断することはできない¹⁷⁾。

従来、文学研究においては、同時進行中の同テーマの研究がいくつか存在しても論文作成にまで影響を及ぼすものは少なく、研究は単独で行なわれると考えられてきた。それにもかかわらず、引用によって研究者が自らの意見を補う必要があるのはなぜか、また、関連文献を認識していることを知らしめておく必要があるのか。さらに、他の研究者による文献を否定することが、自然科学分野よりも多く行なわれているのはなぜなのか。このようないくつかの問題をさらに検討してゆくことが今後の課題であろう。

文学研究における引用行動

最後に、本論文を作成するに際し、御指導賜りました慶應義塾大学文学部図書館・情報学科の津田良成教授に対し、深く謝意を申し上げます。

- 1) Clonin, Blaise. "The need for a theory of citing". *Journal of Documentation*. Vol. 37, No. 1, p. 16-24 (1981).
- 2) Bavelas, Janet Beavin. "The social psychology of citations". *Canadian Psychological Review*. Vol. 19, No. 2, p. 327-340 (1978).
- 3) Garfield, Eugene. "Can citation indexing be automated?". *Essay of an information scientist*. Philadelphia, ISI Press, 1977. p. 84-90 (1965年出版の議事録のリプリント)
- 4) Lipets, Ben-Ami. "Improvement of the selectivity of citation indexes to science literature through inclusion of citation relationship indicators". *American Documentation*, Vol. 16, No. 2, p. 81-82 (1965).
- 5) Moravcsik, M. J.; Murugesan, P. "Some results on the function and quality of citations". *Social Studies of Science*. Vol. 5, p. 86-92 (1975).
- 6) Cole, J.R. "Patterns of intellectual influence in scientific research". *Sociology of Education*. Vol. 34, No. 4, p. 377-403 (1970).
- 7) Cole, S.; Cole, J. "Ortega hypothesis". *Science*. Vol. 178, p. 368-375 (1972).
- 8) Mitra, A.C. "The bibliographic reference; a review of its role". *Annals of Library Science and Documentation*. Vol. 17, No. 3-4, p. 117-123 (1970).
- 9) Chubin, D.E.; Moitra, S.D. "Content analysis of references; an adjunct or alternative to citation counting?". *Social Studies of Science*. Vol. 5, No. 4, p. 423-441 (1975).
- 10) Spiegel-Rosing, Ina. "*Science Studies*; bibliometric and content analysis". *Social Studies of Science*. Vol. 7, p. 97-113.
- 11) Oppenheim, Charles; Renn, Susan P. "Highly cited old papers and the reasons why they continue to be cited". *Journal of American Society for Information Science*. Vol. 29, No. 6, p. 226-231 (1978).
- 12) Cole, S. "The growth of scientific knowledge; theories of deviance as a case study". *The ides of social structure; papers in honor of Robert K. Merton, Coser, L. A., Ed.* New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1975. p. 175-220.
- 13) Ruff, I. "Citation analysis of a scientific career; a case study". *Social studies of Science*. Vol. 9, p. 81-90 (1979)
- 14) Frost, Carolyn O. "The use of citations in lite-

rary research; a preliminary classification of citation functions". *Library Quarterly*. Vol. 49, No. 4, p. 399-414 (1979).

- 15) Crane, Diana. "見えざる大学; 科学共同体の知識の伝播". 岡沢和世訳. 東京, 敬文堂, 1979. 269 p.
- 16) 除外した9論文に含まれていた引用文献の内訳を以下に示す. (件)

文学作品 に対する 引用	他の研究者による文献に 対する引用					計
	基本的 引 用	補助的 引 用	付助的 引 用	儀礼的 引 用	部分否 定的引 用	
48	7	111	46	56	4	272

- 17) Small, Henry G. "Citation analysis". *Progress in Communication*. Vol. 3. Derbin B.; Voigt, M., eds. Norwood (N.J.), ALEX, 1982. p. 187-310.

Smallはこの文献の中で、各引用カテゴリー調査の結果の一部を比較表にまとめている。その表に、さらに筆者がデータを一部加えたものが以下に示す表である。

調査者名 カテ ゴリー	Marav- cik ら (1975)	Chubin; Moitra	Oppen- heim; Renn	Ruff
否 定	14	5	2	1.9
単なる言及 レビュー (比較)	41	20	60	25.4
採用(基礎)	40	32	13	24.4
意見を補う	60	43	28	48.2
対象分野	—	—	—	—
調査者名 カテ ゴリー	Frost	Cole	Spiegel- Rosing	Peritz
否 定	14	6	0.8	—
単なる言及 レビュー (比較)	38	24	2.9	4.2
採用(基礎)	22	—	2.9	57.5
意見を補う	1	36	10.2	29.0
対象分野	22	18	80.0	9.3
対象分野	ドイツ 文 学	科 学 社 会 学	社 会 科 学	社 会 科 学

この表は、各調査で使用されたら引用カテゴリーの意味が、それぞれ微妙に異なっているにもかかわらず、強引に各カテゴリーを比較したものである。従って、この表については、分野ごとの大凡の傾向を見るだけに基みるべきであろう。

- 18) Price, D.J. De Solla. "リトル・サイエンス ビック・サイエンス". 島尾永康訳, 大阪, 創元社, 1970. 224 p.